アジア・キリスト教・多元性　現代キリスト教思想研究会
第15号　2017年3月　5～14頁

松山高吉――その生涯と資料調査の現状――

岡 田 勇 督

１．はじめに

本稿は松山高吉(まつやま たかよし1846-1935)の生涯に関する概略とその研究状況、ならびに近年着手された史料調査の現状にかんする報告を行う。松山は一般的にその名が知られているわけではないものの、江戸・明治・大正・昭和にわたるその長い生涯のなかで、日本のキリスト教界に多くの足跡を残した人物である。教育活動に携わり、草創期の同志社(京都)を新島襄とともに支えて社長代理や理事などを歴任。教授として、自らが若き日に修めた国学や、神道・仏教などの伝統宗教に関する講義を行った。また女子教育にも関わり、神戸女学院(兵庫)や平安女学院(京都)の創設にも関与し、女子教育論についても自説を残している。また聖書翻訳事業においては、名訳と名高いいわゆる文語訳の中心的なメンバーの一人として名を連ねている。事実、いわゆる明治元訳から大正改訳までの全体を通じて、宣教師と共働で作業を行った日本側の委員は松山のみであった。彼の類まれなる日本語の素養は讃美歌の訳詩と作詞にも表れている。日本初の各派共通賛美歌集となる『新撰讃美歌』に関わり、聖公会に移ってからは『古今聖歌集』にも携わった。このように、明治の開国以来キリスト教が日本の地に足をつけていくなかで、松山高吉の働きは大きな位置をしめていたことは間違いがない。しかしその活躍に比して、彼の名前は日本キリスト教史において広く知られているわけではない。

松山高吉

ここで従来の研究状況をごく簡単に振り返ることにする。1935年に松山が亡くなったのち、いくつかの冊子に追悼文などが掲載された以外には、松山についてまとまって書かれた文章はほとんど確認できない。1969年になってはじめて、溝口靖夫が本格的な評伝である『松山高吉』を編著し、松山の生涯とその働きがまとまった形で知られるようになった[1]。

＊本論文は日本キリスト教団信濃町教会からの研究助成によって行われたものである。

[1] 溝口靖夫編著『松山高吉』創元社、1969。

この評伝が基礎となり、その後は松山が携わった各分野の単位において、個別の研究がすすめられてゆくことになる。関根文之助は主に神道思想[2]、手代木俊一は讃美歌の領域に関して研究を残している[3]。なかでも、近年の林正樹による『聖歌・讃美歌の宣教思想――松山高吉におけるエキュメニズムの萌芽』(2013)は、松山高吉に当てられた単著としては実に溝口の評伝以来の研究成果となり注目に値する[4]。またこの成果に続いて、洪伊杓が植村正久や海老名弾正といった周辺人物との関係や思想比較に着手し、緻密な研究を残している[5]。

このような近年における研究の興隆を目の当たりにして、京都大学においては「松山高吉研究会」が結成され、研究上の難点に取り組む試みがはじめられた。具体的には、松山による一次資料の問題である。従来の資料状況としては、林が著書において「著作一覧表」としてまとめているように、松山が『七一雑報』や『六合雑誌』などの雑誌を中心にして発表してきた短めの論説が主なものであった。しかし、松山高吉の孫にあたる松山龍二氏(日本聖公会司祭)が高吉の残した資料を保管していることがわかり、龍二氏とさらにその孫の松山健作氏の協力を得て、残されている資料をスキャンして保存することに決定した[6]。またその際、日本基督教団信濃町教会が主催する「神学研究助成」にも採択され、支援を受けることが決定した(A部門：研究助成「松山高吉の宗教及び神学思想と聖書翻訳の再評価」代表：洪伊杓、期間2015年6月～2017年6月)。

本稿では、まず松山がいかなる人物であるかを確認するために第二節においてその生涯を簡単に概略する。そして第三節では、松山高吉研究会によって着手された彼の資料のスキャンと整理の作業に関しての報告がなされる。

２．松山高吉の生涯[7]

ある人を理解するにあたって、その人物がどのような人生を歩んだかに関する伝記的情報は不可欠である。松山高吉(1846-1935)についてもそれは例外ではない。それどころか、89年という長きにわたって江戸・明治・大正・昭和という四つの時代を駆け抜けたこの人物の理解にとって、その時代状況とのかかわりは切っても切れないものであるといってよい。明治時代のキリスト教にとって重要な人物となる植村正久(1858-1925)や内村鑑三(1861-1930)の生没年と並べてみると、その長寿ぶりはより明瞭になるであろう。

松山が歩んだこの長い生涯を整理するために、本稿では主に彼が住んでいた場所(横浜・京都・神戸)に従って、生涯を以下の七つの時期に区分することを提案する。

---

[2] 関根文之助「「神道」における松山高吉の思想」『高千穂論叢』53(1)、1978年、65-79頁など。
[3] 手代木俊一『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典 明治篇』港の人、2008年など。
[4] 林正樹『聖歌・讃美歌の宣教思想―松山高吉におけるエキュメニズムの萌芽』かんよう出版、2013年。
[5] 洪伊杓「松山高吉と海老名弾正の神道理解に関する比較分析」『基督教学研究』第34号、2014年、67-79頁
「松山高吉と植村正久の関係形成過程とその意味」『キリスト教史学』第69号、2015年、178-196頁。
[6] この作業の途中報告は以下に掲載された。岡田勇督「松山高吉研究会の現状」『キリスト教文化』2016年春号、かんよう出版、2016年、96-97頁。
[7] この節における記述と事実関係は、基本的に溝口靖夫の伝記に最終的に依拠している。また節全体として

①1846-74　初期求道期　（新潟糸魚川、京都、神戸）
②1874-80　第一次横浜期（新約聖書翻訳）
③1880-84　第一次神戸期（神戸公会初代牧師）
④1884-87　第二次横浜期（旧約聖書翻訳）
⑤1887-1910　第一次京都期（平安教会牧師・同志社時代・聖公会へ）
⑥1910-17　第二次神戸期（神戸聖ミカエル教会）
⑦1917-35　第二次京都期（京都聖三一教会）

①1846-74　初期求道期（新潟糸魚川、京都、東京、神戸）

〈初期求道期〉は、松山が生まれ、教養を身に着けながら各地を転々とし、最終的にキリスト教信仰にたどり着くまでの期間を指す。高吉は新潟県糸魚川の名家松山家に生まれることになるが、伝記著者の溝口によれば、松山家はこの地方において代々文化の推進において重要な役割を担っていた。松山家歴代の多くのものが京都に出かけ、そこで文化を修めている。高吉もその例外ではなく、幼いころから漢学・国学・和歌を学び、賀茂真淵や本居宣長の著作に親しんだのち、京都に出て本格的な修学を始める。その後東京に移り、平田篤胤の養子にあたる銕胤、黒川真頼などに師事して勉学を続けた。

23歳の松山高吉(1869年)

松山がキリスト教に接近し、最終的に生涯にわたる信仰を持つことになった経緯は比較的よく知られている。神道を奉ずる彼はキリスト教を国害をなす邪教と考え、その実態を知るために潜入捜査を試みる。このようにして、英学を学ぶという口実のもと彼は神戸へ赴き、アメリカン・ボードの宣教師グリーンのもとへ潜りこんだのである。しかし、彼はしだいに宣教師の人柄とキリスト教の教えに心惹かれてゆく。1873年に切支丹禁止の高札が撤去され、神戸でも摂津第一基督公会が設立され、公に宣教活動が開始される。松山はこの時ついに洗礼を受け、キリスト者としての生涯を歩み始めるのである。

②1874-80　第一次横浜期（新約聖書翻訳）

〈第一次横浜期〉は、キリスト者となった松山が神戸から横浜に移り、聖書翻訳に携わった時期を指す。本稿の分類において、松山は横浜、京都、神戸において各二回まとまった期間

附録の松山高吉年表も参照。

を過ごしているが、二度の横浜期はいずれも聖書翻訳のための滞在となっている。この〈第一次横浜期〉においては特に、明治元訳の新約部分の翻訳が行われた。

洗礼を受けた松山は塚本経子と結婚し、すぐにグリーンとともに横浜へと移る。これに先立って、日本宣教を行う各プロテスタント団体が新約聖書の共同翻訳事業を計画し、各派から代表が選ばれてこの事業に取り組むことになった。宣教師の側ではS・R・ブラウン、ヘボン、グリーンが中心となり、日本人の協力者として選ばれたのが松山高吉、奥野昌綱、高橋五郎の三人であった。この間の経緯に関しては、海老沢有道の著書にも詳しい[8]。

③1880-84　第一次神戸期（神戸公会初代牧師）

〈第一次神戸期〉は、新約聖書翻訳を終えた松山が神戸に戻り、神戸公会の初代牧師として働いた期間を指す。松山が洗礼を受けた摂津第一公会は、この神戸公会の前身である。神戸公会は設立以来グリーンを含めて三人の宣教師が牧会の任にあたっていたが、いずれも仮牧師という身分であり、日本人にして初の牧師である松山の就任は大きく歓迎された。彼はこうして、現在の日本基督教団神戸教会の礎を築き、神戸の地におけるキリスト教宣教の重要な職を担うことになる。

④1884-87　第二次横浜期(旧約聖書翻訳)

〈第二次横浜期〉は、松山が神戸公会の牧師職を辞し、再び聖書翻訳の任に当たるために横浜へと戻ってきた期間を指す。今回の翻訳は明治元訳の旧約部分である。今回は前回の新約の際とは異なり、日本側の参加者は協力者ではなく、正式な翻訳委員としてこの作業に従事することとなった。宣教師の側からはヘボン、ファイソン、フルベッキ、グリーン(グリーンは後辞退)、日本人の側からは選挙によって委員が選出され、松山高吉、植村正久、井深梶之助の三名がこの任に当たっている(ただし財政的な問題などもあり最後まで携わることはできなかった)。ここから、松山は新約と旧約の翻訳を通して一貫して事業に関わった唯一の日本側の協力者であったということがわかる。

⑤1887-1910　第一次京都期（平安教会牧師・同志社、平安女学院時代・聖公会）

〈第一次京都期〉は、旧約の翻訳を終えて横浜から帰ってきた松山がかなり長期にわたって京都に身を落ち着ける時期を指す。事実、この〈第一次京都期〉は牧会経験を積み、聖書翻訳の大任を終えた松山が古都を舞台に華々しく活躍した時期だと言っていい。

松山は平安教会から招聘を受け、1891年までこの教会の牧師を務めることになる。牧師を辞してのちは同志社での活動に力を注いだ。行政においては理事にしばしば選出され、同志社資産管理委員、また1906-7年には社長代理の職まで務めている。また同志社神学校においては神道・日本宗教史、政法学校で日本政治史、普通学校(中学)で国史・国文など、教育活

[8] 海老沢有道『日本の聖書――聖書和訳の歴史』講談社学術文庫、1989年。

動にも広く携わっている。同じく平安女学院での教育に関わったのも京都にいるこの時期である。

また、松山の生涯においても重要なのが、1897年に日本聖公会にて堅信礼を受け、組合教会から聖公会へと転会するという出来事である。この出来事は松山の生涯を描きだすにあたって一つの問題であり、溝口も林もそれぞれ説明を試みている[9]。いずれにせよ、この〈第一次京都期〉は華々しい活躍とともに、壮年松山にとっては激動の時期であったということができるであろう。

⑥1910-17　第二次神戸期(神戸聖ミカエル教会、大正改訳)

〈第二次神戸期〉は、英国聖書協会から依頼を受けて新約聖書の改訳委員となった松山が、教会籍を神戸の聖ミカエル教会(聖公会)に移していた時期を指す。改訳委員長として働いていた恩師グリーンの死を見届けつつ(1913)、松山はフォスとともにヨハネ伝の改訳を担当。1917年にはいわゆる大正改訳版の新約聖書が完成し、同年中に松山は再び京都聖三一教会へ転籍することになる。

大正改訳委員(1915年)

後段（左から）別所梅之助、デビソン、川添万寿得

前段（左から）ハリントン、フォス、松山、ラーネット

⑦1917-35　第二次京都期(京都聖三一教会)

〈第二次京都期〉は、京都に戻った松山が逝去するまでの時期を指す。この期間、松山はすでに第一線から身を退いており、目立った活動は見られないものの、英国聖書会社名誉会員(1919)、米国聖書会社終身名誉会員(1927)の称号を得るなど、従来の活動において残した成果が評価されている。1929年に妻の経子が亡くなってのち、自身も京都洛北において1935年永眠。京都聖アグネス教会で葬儀が執り行われ、同志社関係者の墓がある若王子に葬られる。89年にわたる生涯の幕を閉じたのであった。

３．資料調査の現状 [10]

本節では、松山高吉の遺稿にかんする調査の報告がなされる。その多くがおよそ100年を経ている紙片、原稿用紙であり、ものによっては劣化が激しい。よって、研究グループは資料の整理と保存を行うために、そのすべてを一度スキャンして電子ファイルにし、それを分

[9] 溝口靖夫『松山高吉』106-8頁、林『聖歌・讃美歌の宣教思想――松山高吉におけるエキュメニズムの芽』、137-9頁。

[10] この節の一部は岡田勇督「松山高吉研究会の現状」『キリスト教文化』2016年春号、かんよう出版、

類するという方針をとった。使用した機材は ScanSnap SV600 (Fujitsu) である。

スキャン作業の結果、松山の遺稿は大別して以下の七つに分類された。1. 聖書翻訳、2. 説教・講演、3. 讃美歌、4. 教育、5. 伝統宗教、6. 日本語・日本文学、7. 日記・書簡。

〈1. 聖書翻訳〉には、松山が後半生をとおして関わった聖書翻訳に関する資料が分類される。例えば聖書翻訳の際の訳文メモや、翻訳の草稿などがこれに含まれ、彼の携わった聖書翻訳事業についての重要な手掛かりを提供してくれる。しかし、遺稿には当初予想されていたほどのメモ・草稿は残されていなかった。これに関してはさらなる資料調査が必要となるであろうが、例えば日本聖書協会に所蔵されている資料はこの穴を埋める一つの鍵となるであろう[11]。

スキャン作業の様子

〈2. 説教・講演〉には、松山が行った教会や集会における説教あるいは講演のさいのメモがおもに含まれる。彼は小さな紙片にタイトルや聖書箇所を細かく書きしるして、これを実際に喋るさいに用いていたことが窺える。ここから、松山がどのようなテーマに関してどのような聖句に基づいて語ったのかを読み取ることが可能になり、彼の聖書神学的な発想を見る手がかりとなる。また、日時や場所が記されている紙片については、これを日記の記述と照合することで、彼がどこでどのようなテーマについて語ったのかという伝記的な事実もさらに詳細に明らかになると思われる。

〈3. 讃美歌〉には、彼が長く携わった讃美歌の作詞や訳詩などのメモが含まれる。例えば、“O Come O Come Emmanuel”(久しく待ちにし主よとく来たりて)を翻訳する朱入り原稿などが見つかっており、彼が詞を実際に作り上げる際のプロセスを垣間見ることができる。しかし、これも予想に反して、遺稿の中に占める分量は驚くほどすくない。おそらく讃美歌関連の資料も、別に収集されて保管されている分が多いものと思われる。神戸女学院に設けられている松山高吉文庫やオルチン文庫の資料を照合してみる必要があるであろう[12]。

〈4. 教育〉には、松山が関わった女子教育などにかんする資料が含まれる。これも、平安女学院や神戸女学院側に残っているであろう資料の存在を念頭に置く必要がある。なお、女子教育論に関しても、先行研究が存在する[13]。

〈5. 伝統宗教〉では、神道、仏教、儒教といった日本・アジアの伝統宗教にかんして、松

2016年、96–97頁に基づいている。

[11] この点に関しては、吉田新が調査・研究を進めている。吉田新 「日本聖書協会所蔵聖書翻訳資料について――大正改訳を中心に」日本基督教学会、於：広島女学院、2016年9月。

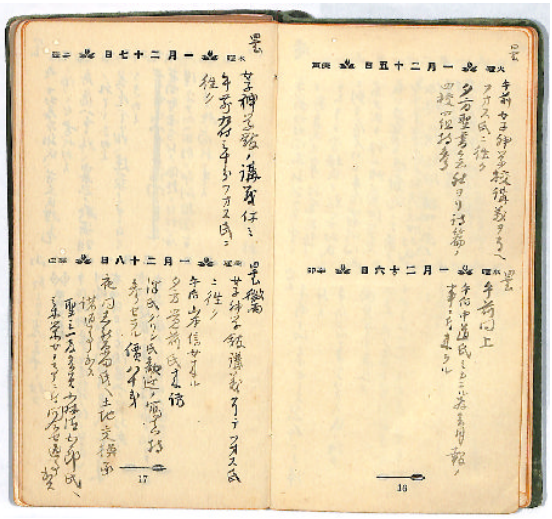
[12] 神戸女学院大学図書館の「コレクション紹介」 http://ilib.kobe-c.ac.jp/?page_id=509 (2017年3月15日アクセス)。

[13] 神山美奈子「松山高吉の女子教育論――巌本善治との比較を通して――」日本基督教学会、於：広島女

山が同志社などで行った授業の講義録、雑誌で発表した論考の手稿などが含まれる。多くの資料は紙片として残っているものが大半であるが、この〈伝統宗教〉にかんする資料は冊子で残っているものがほとんどで、分量も多い。

〈6. 日本語・日本文学〉は、この遺稿中もっとも大きな割合を占める分類の一つであり、同志社などで行った日本古典文学にかんする講義録のほか、原稿用紙などに残された大量の和歌が発見されている。聖書翻訳や讃美歌作詞などの業績から、松山の日本語に対する素養には以前から関心が寄せられていたが、〈日本語・日本文学〉に分類される遺稿の量はそれを証左している。

〈7. 日記・書簡〉には、今回のスキャン作業によってもっともまとまった形で手に入ることになった日記と書簡の資料群が含まれる。松山はその几帳面さから特に後半生、ほぼ欠かすことなく日記を残しており、これは彼の伝記的事実を確定するうえで重要となるだけでなく、日本キリスト教史にとっても重要な史料となるであろう。彼の年譜と日記がある年を対応させた表を資料１として作成した。また松山の広い交友関係から、彼の手元には多くの手紙が残っており、松山をとりまく人間関係の解明に寄与することになるであろう。この書簡の一覧として資料２を作成した。



日記(↑)と書簡(↓)

このスキャン作業の意義と位置づけにかんしてもここで一言しておく。本作業は単にキリスト教に携わった一人物の資料保存だけではなく、近代日本宗教史研究の全体的動向という文脈においても説明される必要がある。近代日本宗教史の研究でここしばらく意識されていると思われるのは、刻々と消えゆく明治・大正・昭和の一次資料を発掘・保存するという問題である。明治のはじまりから150年を控え、戦後も70年をすでに迎えた現在において、当時の出来事を伝える資料は次々と消失しており、サルベージが不可能になってしまう日もそう遠くないかもしれない。そのような中で、例えば近代仏教研究は迅速な対応を見せている。明治期において大きな影響力を誇りながらも後代には忘れ去られてしまった近角常観(1870-1941)にかんする基礎的な史料の保存やそれをもとにしたモノグラフが刊行され[14]、近代仏教という分野全体にかんする入門書、ハンドブッ

学院、2016年9月。

[14] 岩田文昭『近代仏教と青年――近角常観とその時代』岩波書店、2014年。

クなどが着実に整備されている[15]。このように考えれば、本研究は近代日本宗教史の動向の内部におけるキリスト教側からの貢献という位置づけを有しているということができるであろう。

４．むすび

むすびにかえて、ここでは松山高吉研究の今後の展望と課題を述べる。展望としては、未だ各所に散在している彼の資料を収集しつつ、今回のスキャンによってアクセス可能になった諸資料を読解していくことが求められる。特に、今回の調査によって全体の見取り図が明らかになった日記と書簡を解読し、縦軸としてのクロノロジーと横軸としての人間関係のなかに松山高吉を位置づけることによって、日本キリスト教史という大きな枠のなかにおける松山の立ち位置を明らかにすることが可能になるであろう。特に日記は膨大な量が残されており、その資料的価値の解明が待たれるところである。

他方、課題として挙げられるのは、他分野の研究者との共同研究の必要性である。松山高吉という人物は、国学というバックグラウンドとその活動範囲もあって、キリスト教研究だけではカバーしきれない幅の広さを有している。例えば、彼の直筆になる資料はほとんどが江戸・明治期のくずし字によって書かれているため、翻刻・資料読解のためには近世・近代日本史の研究者の協力が不可欠となる。また、若き松山が修めた神道に関連して、日本宗教史の側からみた松山の位置づけ・価値なども問題になってくる。さらに、膨大に残された和歌の草稿や、それが聖書翻訳・讃美歌作詞など彼の言語活動に及ぼした影響などについても、日本文学研究の観点から明らかにする必要性があると思われる。松山高吉という人物を本格的に解明するにあたって、専門分化の時代においては、このように多様な研究者が集まって共同研究を行うことが不可欠となってくるであろう。

松山高吉にかんする研究は多くの課題を残しつつ、日本キリスト教史という領域においていまだ十分に光の当っていない点として研究者の前に立ちはだかっている。ここに残された一定の成果を土台として、この未知の領域に対するさらなる解明が要求されているといえよう。

（おかだ・ゆうすけ　京都大学大学院博士後期課程）

[15] 入門書としては、碧海寿広『入門　近代仏教思想』筑摩書房(ちくま新書)、2016年。
ハンドブックとしては、大谷栄一、吉永進一、近藤俊太郎(編)、『近代仏教スタディーズ――仏教からみたもうひとつの現代』法藏館、2016年 があげられる。

資料１: 松山高吉　年表

西暦	元号	年齢	松山高吉関連事項(年譜)	区分	日記の有無	備考
1846	弘化3	0	誕生(新潟県・糸魚川)	初期求道期		
1858	安政5	12		(新潟糸魚川、京都、神戸)		
1859	安政6	13		1846-74		
1861	文久1	15				
1862	文久2	16				
1867	慶応3	21				
1868	明治1	22				
1869	明治2	23	京都、白川家学館で国史等学ぶ			
1871	明治4	25	黒川真頼家で国学を学ぶ			
1872	明治5	26	神戸のD.C.グリーンに出会う			
1873	明治6	27				
1874	明治7	28	D.C.グリーンより受洗(摂津第一公会)			
1874	明治7		塚本経子と結婚			
1874	明治7		新約聖書翻訳協力のため横浜に移転	第一次横浜期		
1876	明治9	30		(新約聖書翻訳)　1874-80		
1877	明治10	31	(東京聖三一神学校開校)		○	
1878	明治11	32	(大阪川口教会竣工)			
1879	明治12	33	新約聖書翻訳完成		○	
1880	明治13	34	神戸公会初代牧師に就任(～84.9)	第一次神戸期	○	
				(神戸公会初代牧師)　1880-84		
1882	明治15	36				
1883	明治16	37	同志社社員(理事)を受諾(～1893.7)			
1884	明治17	38	旧約聖書翻訳委員(7月横浜へ)	第二次横浜期		
1886	明治19	40	『新撰讃美歌』委員に就任(一致・組合合同)	(旧約聖書翻訳) 1884-87	△	伝道会社記事
1887	明治20	41	旧約聖書翻訳完成(元訳)		○	
1887	明治20	41	同志社病院、京都看病婦学校発起委員		○	
1887	明治20	41	京都平安教会第二代牧師に就任(1891.9）	第一次京都期	○	
1888	明治21	42	『新撰讃美歌』(一致・組合合同)完成出版	(平安教会牧師・同志社時代・聖公会へ)		
1888	明治21		神戸女学院嘱託(教師) (～1889)	1887-1910		
1889	明治22	43	同志社常務理事(常議員会常置議長)に就任			
1890	明治23	44	同志社(教会)仮牧師に就任(～1890.4) (新島襄没)		○	
1890	明治23		日本基督伝道会社社長に選出・就任(～1890.4）		○	
1890	明治23		京都平安教会名誉牧師就任		○	
1891	明治24	45	同志社神学校教授に就任(～1896.6）		○	
			同志社法政学校教授、理科学校教授〔兼〕		○	
			普通中学(中学)、女学校の教授〔兼〕		○	
1892	明治25	46	同志社資産管理委員に就任(～1899.9）			
1893	明治26	47				
1894	明治27	48				
1895	明治28	49	(『日本聖公会祈祷書』刊)			
1896	明治29	50	平安女学院普通部・高等部教授(～1909.3.17)		○	
1896	明治29		同志社教会より洛陽教会へ転籍		○	
1897	明治30	51	同志社社員(理事)を再受諾(～88.12)			
1897	明治30		日本聖公会で堅信礼を受ける（マキム監督）			
1898	明治31	52	同志社綱領問題起こる（キリスト教教育を削除）			
1899	明治32	53	同志社社員（理事）再選　（～1911.3）			
1899	明治32		日本聖公会聖歌編集委員、祈祷書改正委員			
1899	明治32		同志社普通学部・高等学部教授(～1906.4)			
1900	明治33	54	『さんびか』（各教派共通)の編纂委員		○	
			日本聖公会『古今聖歌集』編集委員		○	
1901	明治34	55	日本聖公会『古今聖歌集』完成(初版・無譜）		○	
1902	明治35	56	日本聖公会祈祷書聖書改正委員(第7回総会)		○	
1902	明治35		『さんびか』（各教派共通)完成		○	
1903	明治36	57	平安女学院校歌作詞(卒業式初披露)			
1904	明治37	58			○	
1905	明治38	59	第21回日本組合教会総会、ミッションから独立決議		○	
1906	明治39	60	同志社社長代理就任(～1907.1）		○	
1907	明治40	61			○	
1908	明治41	62			○	
1909	明治42	63	日本聖公会『子供讃美歌』編集委員会参与		○	
1910	明治43	64	英国聖書協会より聖書改訳委員委嘱		○	
1910	明治43		京都聖三一教会より神戸聖ミカエル教会へ転籍	第二次神戸期(神戸聖ミカエル教会)	○	
1911	明治44	65	聖書改訳委員会・神戸部会組織(フォス監督)	1910-17	○	
1912	大正1	66			○	
1913	大正2	67			○	
1914	大正3	68	日本聖公会祈祷書聖書改正委員(第11回総会)		○	
1914	大正3		日本聖公会『古今聖歌集』改訂委員		○	
1915	大正4	69			○	
1917	大正6	71	『改訂　新約聖書』完成(改定委員会訳)		○	
1917	大正6		神戸聖ミカエル教会より京都聖三一教会へ再転籍	第二次京都期(京都聖三一教会)	○	福音日記あり↓
1918	大正7	72		1917-1935	○	○
1919	大正8	73	英国聖書会社名誉会員に推薦される		○	○
1920	大正9	74			○	○
1921	大正10	75			○	○
1922	大正11	76	日本聖公会『古今聖歌集』改訂版出版		○	福音日記ここまで
1923	大正12	77			○	
1924	大正13	78			○	
					○	
1925	大正14	79			○	
1926	大正15/昭和元年				○	
1927	昭和2	81	米国聖書会社終身名誉会員に推薦される		○	
1928	昭和3	82			○	
1929	昭和4	83	妻経子逝去			
1930	昭和5	84			○	
					○	
1931	昭和6	85	(改訂『讃美歌』刊)		○	
1932	昭和7	86				
1933	昭和8	87				
1934	昭和9	88				
1935	昭和10		逝去(京都洛北)			
1935	昭和10		京都聖アグネス教会で葬儀(佐々木二郎長老・司式)			
1935	昭和10		神戸英国聖書協会記念会(神戸聖ミカエル教会)			
1935	昭和10		京都聖三一教会報『ささやき』(松山高吉記念号)発刊			

※林正樹『聖歌・讃美歌の宣教思想―松山高吉におけるエキュメニズムの萌芽』かんよう出版、2013年をもとに作成

資料2: 松山高吉　書簡

	数	日付（年.月.日）	人物	生没年	所属教派（受洗教会）	出身地	人物概要	備考
1	15	1908-1934	米国聖書協会					
2	11	1905-1935	英国聖書協会					
3	1	1880,2	東京府庁					
4	1	1895.3.26	内務省					
5	1	1917?.10.13	福音印刷合資会社					
6	1	1918.3.12	オルチン	1852-1935	英聖公会	英ケント州	教会音楽家、讃美歌事業	
7	1	1917.10.10	フォス	1848-1932	英聖公会	?	神戸伝道、神戸松蔭を開校、『古今聖歌集』など讃美歌	
8	1	1889?.10.3	グリーン	1843-1913	アメリカン・ボード	米マサチューセッツ州	神戸教会、聖書翻訳、同志社教授	
9	1	?	高吉からグリングへ	1849-1934	アメリカ・ドイツ改革派教会→聖公会	?	東北伝道→京都聖三一教会初代牧師	
10	1	1906.5.11	パロット	?	?	?	英国聖書協会	高吉遺品・追悼礼拝プログラム
11	1	1906.6.20	ラニング	1843-1917	米聖公会	米ニューヨーク州	医師。大阪伝道、聖バルナバ病院、川口教会オルガニスト	
12	28	1904-1921?	チング	1849-1927	米聖公会	米オハイオ州	大阪英和学舎、大阪聖テモテ、京都聖ヨハネ、立教	
13	1	1919.12.31	青木庄蔵	1864-1947	組合教会(天満教会)	奈良・吉野	実業家→社会事業家(社会厚生・禁酒運動)	
14	2	1907.10.12他	池澤駿太郎	1876-1956	聖公会	奈良・大和	川口、奈良、西ヨハネ、ハワイにて司祭、『古今聖歌集』	
15	4	1934.1.13他	井深梶之助	1854-1940	日本基督教会(長老派)	福島・会津	牧師、明治学院創立理事、総理	
16	1	?	今泉真幸から小崎弘道へ	1871-1966	組合教会(同志社教会)	新潟・北蒲原	同志社教授、牧師、口語訳聖書刊行	
17	1	?	大塚英太郎	?	?	?	?	
18	1	1890,5	折田彦市	1849-1920	ニュージャージー大学にて受洗	鹿児島薩摩	第三高等学校校長	京大百年史、神陵文庫9巻の板倉論文
19	4	1917.11.11他	川添万壽得	1870-1938	日本基督教会(長老派)	高知県江ノ口村	牧師、『福音新報』理事、大正改訳、青山明治教授	
20	4	1887.3.29他	黒川真頼	1829-1906	神道	群馬・桐生	国学者。東大講師。国文、国史、美術、工芸等幅広い活躍	明治時代史大事典
21	3	1934.1.4	小崎弘道	1856-1938	組合教会(熊本バンド)	熊本	『六合雑誌』、霊南坂教会、警醒社、同志社社長	
22	1	1928.5.5	斎藤松洲	1870-?	?	?	日本画家。大阪生、東京住。俳画に長ずる。	思文閣美術人名検索データベース
23	4	1932.11.24他	下村孝太郎	1861-1937	組合教会(熊本バンド)	熊本	同志社英学校→渡米→同志社ハリス理化学校等	
24	1	1887.4.3	鈴木弘恭	1844-1897	神道	茨城・水戸	弘道館→間宮永好・黒川真頼に師事。お茶の水・学習院教授	
25	1	1885.8.18	高島嘉右衛門?	1832-1914	?	江戸	実業家。ガス, 鉄道, 農場等。学校にバラJ.H, J.Cを招集	デジタル版 日本人名大辞典+Plus
26	1	?	武井勝太郎	?	?	?	?	
27	1	?	辻井享からフォスへ	1871-1945	聖公会	大阪・摂津	横浜聖アンデレ教会。関東大震災の復興。	
28	1	1919.12.31	中村栄助	1849-1938	組合教会(新島宅)	京都	京都会議員、国会議員、同志社、四条教会、京都YMCA	
29	7	1889.1.5他	新島襄	1843-1890	組合教会(アンドーヴァー神学校)	群馬・安中藩	アマースト、アンドーヴァー、同志社英学校創立	
30	1	1889.8.19	西原清東	1861-1939	組合教会?	高知県土佐市	同志社社長。自由民権家。アメリカ、ブラジルで農場経営	明治時代史大事典
31	2	1926.9.7他	貫民之介	1882-1961	聖公会	東京・築地	東洋大(印哲・中哲)→立教教授→古今聖歌集	
32	1	1920.6.13	原胤昭	1853-1942	日本基督教会(東京第一長老教会)	東京・日本橋	原女学校→十字屋(出版)→教誨師→七十会	
33	1	1971.7.1	原田健から松山初子へ	1892-1973	?	?	組合教会牧師・原田助の息子。外交官。	
34	2	1929.2.19他	松村介石	1859-1939	日本基督教会→道会	兵庫・明石	東京一致→山形英学校→基督教青年会道会	
35	1	1914.2.18	高吉から妻　経子へ	1859-1929		兵庫・神戸		溝口靖夫『松山高吉』
36	1	1925.7.28	高吉から娘　初子へ	?				
37	1	1925.7.12	吉田作彌	1859-1929	組合教会(熊本バンド)	熊本	外交官、ハーグ公使館、三高教授、同志社講師	
38	1	1893.6.28	銀井？から高吉へ	?	?	?	?	
39	1	?	松山？から高吉へ	?	?	?	?	
40	1	?	松山耕造?から高吉へ	?	?	?	?	
41	1	1908.9.16	名山？から高吉へ	?	?	?	?	
42	1	1935.6.15	?から松山初子へ	?	?	?	?	
43	1	?	禅宗和尚から松山良輔へ	?	?	?	?	
44	4	?	他、？から高吉へ4通	?	?	?	?	
							※生没年以右の情報は、備考に特記がない限り、日本キリスト教歴史大事典(教文館)による。	